

## 離島の子育て

宮内 洋                      菅野 幸恵                      請川 滋大  
(札幌国際大学)              (青山学院女子短期大学)      (北海学園大学)  
   岡本 依子                      根ヶ山 光一  
   (湘北短期大学)                      (早稲田大学)

### <要 旨>

本研究では、北海道、東京都、沖縄県という、地理的には広範囲に及ぶ3つの地域の6つの島における子育ての様相を探索した。これまでほぼ未着手であったと思われる島嶼社会における子育ての実態を探り、それにまつわる知見の採集を進め、次に各々の地域での子育ての比較を行った。このような基礎的な研究を積み重ねた先に、これまでの「日本の子育て」とされる行為の相対化、そして「日本の子育て」再考の端緒が見えるものと私たちは信じている。具体的には、各々の離島においてフィールドワーク・調査を行ってきた研究者がこれまでの知見をもとに、各々の離島において母親たちを中心に個別に聞き取り調査を実施した。調査項目は、簡略化すると、以下の3点である。①当該島における子育て上の利点、②当該島における子育て上の問題点、③親による②の問題点に対する解決の方策である。結果から、子どもの存在が持つ要求性は、家族と地域のネットワーク構築への推進力を持っているということを改めて確認することができた。

### <キーワード>

島嶼社会、離島、子育て、北海道、東京都、沖縄県、ネットワーク

### はじめに

本研究では、北海道の離島、東京都の離島、沖縄県の離島という3都道県であるが、地理的には非常に広範囲に及ぶ3つの地域における子育ての様相を探索している。日本国における子育てに関する研究はかなりの蓄積があり、その数は膨大である。地域の歴史や文化に重きを置いた子育ての研究も少なくはない。しかし、離島部については取り残されてきたように強く感じる。本研究では、北海道・東京都・沖縄県のまぎれもない一地域である離島部に焦点を当てることによって、まずはこれまでほぼ未着手であった島嶼社会における子育ての実態を探り、それにまつわる知見の採集を進め、次に各々の地域での子育ての比較を行う。つまり、離島部における子育てには地域が異なろうとも共通点があるのか否か。さらには、都市部の子育てとの共通点もあるのか否か。そのような基礎的な研究を積み重ねた末には、既存の「日本の子育て

とされる行為の相対化、そして再考の端緒にたどり着くことができようが、今回の研究だけではまだ道程は遠いだろう。

本研究遂行に際しては、各々で個別に各離島の生活と保育と子育ての研究を行ってきた研究者たちに呼びかけ、共同研究を行っていくために「島嶼社会発達科学研究会」を2003年に立ち上げた。本研究は、その記念すべき第一弾となるものである。具体的には、各々の離島においてフィールドワーク・調査を行ってきた研究者がこれまで各自で積み上げてきた知見をもとに、各々の離島において母親たちを中心に個別に聞き取り調査を実施した。調査項目は以下の3つである。①当該島における子育ての利点、②当該島における子育ての問題点、③②の問題点の解決の手だてである。各離島における文脈に即した聞き取り調査を目指したために、形式が同一ではない。文脈が異なるわけであるから、同一の調査プロセスにはなり難いであろう。

都市部の子育てには、「子どもの成長発達に欠かせない安らぎのある『空間、時間、仲間（「三間」）』」などに制限が多く、この「三間」は「子育て期の家族とりわけ母親たちの親密圏での閉塞感を取り除くためにも重要な資源である」という指摘もある（矢澤 2003, p.66）。本研究の共同研究者である岡本依子が私たちの研究会において、離島の子育てと都市部の子育てに対して非常に面白いたとえをした。すなわち、都市部の子育ては「分譲マンションの子育て」であり、離島の子育ては「社宅の子育て」であるというのである。その含意は、前者は匿名性に守られて近所付き合いをしなくてすむ分、近隣関係に煩わされることはないが、一方で、子育てにおける近隣のサポートも受けられずに、個別に閉鎖された空間に閉じ込められたような感覚に陥る恐れがある。後者は、親の職業も職位も、そこから類推される年収までもが互いに知られる状態にあり、匿名性など望むべくもないが、子育てに関しては互いにサポートをし合ったりする、個別の閉鎖された空間に閉じ込められることのない、逆に言えば閉じこもることのできない、開放された子育てというのである。先の「三間」を用いると、前者は保証された空間と時間を入手する一方で仲間の欠如という状態であり、後者は望む望まぬにかかわらず仲間が存在するとともに常に開かれた空間と時間の中にいると説明ができるかもしれない。そして、両者はただひたすら受動的な存在ではない。前者は「仲間」を求めるために子育てネットワークを組織化し、後者は閉じた空間と時間を一時的にでも入手するためにしばし島を離れるのかもしれない。それでは、各離島について個別に見ていきたい。

（宮内洋）

## 1 節 北海道の離島における子育て

### (1) 対象地域・対象者

私たちが対象とした地域は、北海道の最北端にある2つの島々、利尻・礼文のうち南側に位

置する利尻島である。海面から直接立ち上がっているかのような利尻山（標高 1721m）を本体とする利尻島は、北海道北部、稚内市の西約 50km に位置している。島の行政区域は東側の利尻富士町、西側の利尻町に二分されており、山すその周囲 60km 余りの沿岸部に点在する集落に 6500 人余が居住している。人口では道内最大、面積でも北方領土を除けば最も大きな離島となる。

現在、島内の主要な産業は、漁業と観光業である。漁業の主力商品は昆布とウニであり、それらは全国的に大変有名なブランドとなっている。島と稚内とを結ぶフェリーは1日2~4往復運行されている。ここ15年間で人口が約3分の2になり、過疎化と少子高齢化が進んでいる。島外との関係で述べると、稚内からの航路が主要な交通機関となっているために、そちらとのつながりが最も深い。

この島内で、私たちは保育所における保育観察と子育てについてのインタビューを行った。保育者はいずれも利尻島出身者であった。

### (2) 子育てにおける利点・問題点

#### ① 自然環境の豊かさ

「自然の豊かさ」という点が、子どもたちにとって恵まれていると語られる事が多かった。しかし、それも問題点と表裏一体のところがあるようだ。例えば、浜に出て磯遊びをするなどということは昔よく行われており、「がんぜ（うに）」やカニを採って遊んでいたという。それらを浜で焼いて食べるのが、子どもたちにとっておやつ代わりになっていた。ところが今は、水産資源の保護という観点から子どもたちと言えども、うになどを勝手に採って食べると密漁ということになってしまい、厳しく管理されているという。プールができ、子どもたちも安全に水遊びが出来て良い反面、磯遊びをしなくなり海への興味がなくなっている。これでは、漁業や地元産業に就くなどという考えも起こらないのではないかと危惧する声もある。島の一部で

は、子どもたちが「一日にX個までならウニを採って良い」という独自のルールを漁業協同組合に掛け合って作り、海や浜に親しみを持てるような環境整備をしているとのことであった。

## ②人間関係の緊密さ

島では、稚内からのフェリーが着く錨泊（おしどまり）が最も大きな地区となっている。この錨泊を除いた他の地区では、一学年が数名という状態が毎年続いている。そして保育所の数年間を含め、その後小学校、中学校と進学し高校へ入学するまで、この少ない人数のほぼ同じメンバーでクラスが形成されていくこととなる。そうすると、良きにつけ悪しきにつけ10年前後の期間を同じ顔のメンバーが机を並べることになる。これは、一見したところ牧歌的な風景を想像させるが、当人たちにとっては非常に息苦しい側面もあるようだ。このような少人数ではクラス替えということはいえないので、同級生から逃れることはできない。すると、その中で弱い立場にいる子どもや、いじめの対象になりそうな子どもがその人間関係の呪縛から解放放たれるのは、中学校を出る時を待たねばならないことになる。これは長期間の苦痛となるであろう。

## ③物資の購入について

島と稚内間にフェリーが行き来しているものの、やはり子育てをしているお母さん方が必要なものを手に入れるには困難な状況がある。しかし最近では、通信販売を利用する若いお母さんがいたり、量販店に近いお店が島内にもできたために以前よりはずっと良くなっている。この量販店のおかげで、子育てには欠かせないオムツなどもかつてよりは比較的安く入手できるようになっているという。

利尻に最も近い大きな街である稚内には、大きなスーパーがあり、そこで子ども服を購入することはできるのだが、どうしても皆がそこで買い物をすることになるので、島の子どもたちが同じような服を着ているという状況が起こる。

かつてはそれが当たり前であり、仕方ないこととして受け入れられていたのかもしれないが、現在はそれを克服できるような手段があるわけである。その一つが通信販売であり、また自家用車のままフェリーに乗って札幌や旭川などの大きな都市部へ買い物に行くということなのだろう。ベビー用品の品揃えが豊富な札幌の量販店には、島からも買い物へ出かける人がいるようである。

## ④医療について

2004年から島内には小児科医がいなくなったということが、島での育児状況を変える大きな要因となっている。島では出産できないということにも繋がる。妊婦になってからの検診は内科医が見てくれるようだが、出産期の前後になると島外の病院などで過ごすことにならざるを得ない。これは今後若い人たちが子どもを産み育てていきたいという気持ちに、大きな歯止めをかけることになるのではないだろうか。

医療の問題は出産だけに限らない。幼児期のアトピー性皮膚炎などの治療においても、フェリーで稚内まで行かなくてはならないというのである。これは、将来生まれてくる子どものことを考えても、ずいぶんと不安要因になるであろう。

ただ他の島々と比べてみると、利尻はそれほど厳しい状況に置かれているわけではないということも聞かれる。利尻島には利尻空港があり、隣の礼文島とは異なり、札幌からの直行便で飛行機が往来している。この事実は、観光だけでなく医療の面でもずいぶんと心強い味方になっているという。

## ⑤保育施設について

島では乳児期は家で育て、3歳になると保育園へ入れるという母親が多い。これは都市部とは異なる状況にある。つまり、母親が働いているから保育園、専業主婦だから幼稚園といった選択ではなく、3歳になったら一律みな保育園に入れるというのである。入所基準は、過疎の

地域ということもあり、都市部に比べて寛容に運用しているようである。だが近年は3歳になる以前から保育園に行く子が多い。自宅で子育てをしている場合、ただでさえ子どもが少ない地域の中で他の子どもたちが保育園に通うとなると、同年代の遊び相手がまったくいないことになってしまう。保育園へ預けることで、近い年代の子どもたちとの遊びを保障してあげるといった考えが親にはある。母親に保育園へ預ける理由について尋ねると、「子どもがかわいそうだから」という言葉も聞かれるという。

また現在でも1歳未満の子育ては大変で、保育所では対応しきれないために、働くお母さんたちは何とか預かってくれる人を探すという。もし実家が島内にある人であれば、親に預けることも考えられる。しかし、公務員（教員や警察官など）は転勤族であるため、島内には親戚がいないことの方が多い。そのため、小さな子どもを預かってくれる人を探すのに一苦労する。都市部のように、民間や公設を含め多様な子育て支援のリソースが存在するところと比べてみると（まだ十分ではないということは理解できるが）、その苦労は計り知れない。

### (3) 道内の他のへき地と比較してみても

それぞれの島における子育ての利点や困難さを調べると、これらは離島ばかりではなく、北海道内の他のへき地にも同様なことが言えるのではないかと感じる。北海道には、利尻島にある二町（利尻町、利尻富士町）よりも人口の少ない村がたくさん存在する。

上記のような子育ての問題が、少子化の影響なのか、または離島という地理的な条件の問題なのかは、島外の地域と比較してみなければわからない。そこで、利尻島について調べたのと同じように、道内のへき地をこれまで数回所転勤してきた保健師から子育ての様子について聞き取りをした。

まずは物資の購入については、「物資が限られている」という点においては島と同じような状

況が語られた。しかし、物資を得るための移動については、島のほうが少しの天候変化でも船や飛行機が欠航しやすいことを考えると、本当にまったく島外との物資の行き来が途絶えるという意味において、より孤立する頻度とそれに対する恐れは強いのかもしれない。

北海道では男女問わず運転免許を取得する割合が高い。そのため、自分が運転する車で近隣の町へ買い物に行くのは日常的なことである。首都圏と違い渋滞に巻き込まれることもまずないので、特に自分の住む町ということにこだわらず、近くに大きなスーパーやショッピングセンターが出来たといえば、ドライブがてらそこに買い物に出かける。そのように考えると、離島と違って「地続き」というのは大きなメリットであり、いくら過疎地域・へき地に住んでいるといえども、雪のシーズンとなる冬を除けば、買い物に関して日常的に不便さを感じるということはないだろう。

医療に関しても同様に、へき地でも不十分な点は多いが、陸路を使つての移動は可能である。また、公的および民間の子育て支援サービスが確立されていない地域も多いので、人的なネットワークがない転入者から、子育てに関する不安や不満が出てくることが多いということである。聞き取りをさせていただいた保健師さんの言葉を借りれば、「子育て」が「孤育て」になっているという。これは別な意味で、人は多くとも近隣の人々との関係が希薄である都会にも通じるところであろう。

最後に、同じ離島という地理的条件であっても、それぞれに価値観や考え方、風習があり、仮に子育てに対して同じ課題を持っていたとしても、それらの捉え方や行動が全く異なるのではないかと感じる。沖縄や小笠原と異なり、利尻・礼文は夏の一時期しか観光地として潤うことはない。そのためか、若い人たちがこの地に夢を見て移り住むというケースは20代前半の独身者などにはわずかにみられるが、世帯を構

え子どもを育てていくといった世代ではまずそのような移住者はいない。ちょうど子育てをする世代（20代後半から30代）は、ずっと島で生活している人たちか、もしくは元々島で生まれた人たちが一度島を出て戻ってきた場合、そして教員を含めた公務員がたまたま転勤で子育てをしている数年間をこの島で過ごすというパターンが多いようである。そのせいか、小笠原のように若い人たちが移り住んできたことにより、新しいコミュニティが形成されたなどという話はあまり聞かれない。（請川滋大・宮内洋）

## 2節 東京都の離島における子育て

### （1）対象地域・対象者

本節では東京都の小笠原諸島の子育てについて、島で行った聞き取り調査と質問紙調査の結果にもとづき言及する。小笠原諸島は東京から南南西に1000km離れたところに位置する。有人の島は父島と母島のみである。父島にはほぼ6日に一便定期船が運航されており、母島には、父島から週5便定期船が運航されている。竹芝桟橋からの所要時間は25時間半である。人口は2758人（2004年5月現在）。出生数（2002年）は37で（出生率：13.3%、島部全体：8.3%）、内地や他の離島に比べるとそれほど高齢化は進んでいない。

父島には公立保育園があり、母島にはその分園がある。幼稚園はない。保育園には2歳から就学前の子どもが通う。ほかに幼児が集団保育を経験する場として、父島には社会福祉協議会が運営する「ちびっこクラブ」があり、3～4歳児が二人の指導員のもと、自然のなかで活動を行なっている。「ちびっこクラブ」に通っている子どもも、就学前の一年間は保育園に通う。母島には、自主保育のグループ「やしっこクラブ」があり、週1日活動を行っている。ちなみに父島には小学校、中学校、高等学校が、母島には小学校、中学校がある。

就労者の約15%が公務員で、転入・転出が多く、親の転勤などの関係で一定期間のみ滞在し島を出て行く子どもも多い。一方で在島年数が長く、

小学校から高校まで小笠原で過ごす子どももいる。

### （2）子育ての利点

どの母親も自然環境の豊かさをあげていた。小笠原諸島は、亜熱帯の気候に属し、大陸と一度も地続きにならなかったことがないので、「東洋のガラパコス」と呼ばれるほど独自の生態系が築かれている。その豊かな自然と触れあいながらのびのびと子育てをすることができるし、温暖な気候により、トイレトレーニングがスムーズに行なえるという声もあった。環境に関しては治安のよさをあげる母親が多かった。車が少なく、誘拐などの犯罪の心配もないので、安心して外で遊ばせることができる。

また小さいコミュニティの中での子育てということも利点として捉えられていた。外に出れば皆が声をかけてくれるし、親同士の交流も活発で、内地のような“公園デビュー”の心配をする必要もない。自分だけが子育てしているのではなく、地域で子どもを育てているように感じられるようだった。さらに夫の存在も大きいようである。小笠原では多くの就労者が昼食を自宅でとる。学校に通っている子どもたちも給食がないので、家で食事をとる。通勤時間も短いので父と子どもが触れる時間が長く、父親が子育てに参加する機会が多い。

### （3）子育てをしていく上での問題点

島で子育てをしていて不安になることの一つに、医療体制の乏しさがある。父島と母島には診療所が一つずつあるだけである。小児科や耳鼻科などあらゆる領域の専門医が常駐しておらず、医療機器も限られているので、専門的な治療は内地にいかなければならない。また内地のように自分と合う医者を選択することもできない。幼い子どもを抱える親にとって医療体制が不十分であることは大きな不安材料となる。何かあったときに内地に行くまでにはかなりの時間がかかり、対応の遅れから、取り返しのつかないことになってはという心配は常に抱えてい

るのだろう。

物質の入手しにくさも子育ての問題点の一つである。父島にはスーパーは2軒あり、多くの人がそこで食料や日用品を購入する。最近では通信販売なども利用できるが、手に入れるまでに時間がかかるし、日用品に関しては、とくに育児用品は急を要する場合も多い。しかし紙オムツなど育児用品は種類も少なく、高価であり（小笠原の物価は比較的高い）、これも子育て中の家庭にとっては大きな負担である。

子育てに対するサポートも充実しているとは言えない。とくに、保育園に預けることのできない2歳までの子どもを誰に預かってもらうかが大きな問題であるという。働いていなくても、子どもや自分が病気のときなどには預かってくれる人を探さなければならない。そんなとき内地の親たちは自分の両親を頼りにすることが多いが、小笠原に在住している人たちは身近に親類がいない。質問紙調査の対象となった家庭のほとんどが核家族であり、そのうち、島内に親類のいるものは2割で、在島年数が比較的長い（3年以上）の人たちに限られていた。つまり、ほとんどの家庭は身近に親類がいない環境で子育てをおこなっているということになる。

子どもたちの教育環境、将来に対する不安の声も多く聞かれた。固定されたメンバーの中で、競争心や緊張感が育たないのではないかと、何かに取り組みにしても得意な人に任せてしまい、自分の世界を広げるといふことをしなくなるのではないかと危惧する親は多い。将来に対して、この島以外での経験をせずに、居心地が良い所に居続けることが子どもにとってよいのか不安を感じるようであった。質問紙の結果では、かなりの親が自分は小笠原に住み続けたいと考えているにも関わらず、子どもにずっと小笠原に住んでほしいと答えたものは2割に満たず、逆にほとんど（9割以上）の親が子どもに小笠原以外での経験をしてほしいと考えていた。島の環境をよしとしながらも、子どもの将来を考

えると、別の場所での経験も必要であるというジレンマを抱えているのである。

#### （4）解決の手だて

小笠原での子育てで問題になることは多岐にわたり、とくに物的・人的資源の少なさがその問題に関わっていた。しかし、その問題は、島での子育ての身近な人間関係（ネットワーク）によって補われているようであった。

医療面について、父島のHさんは内地のように医療機関が充実していないが、小さい頃から経過をずっとみてもらっている安心感や、いざというときは夜中でも119番をすればすぐにみてもらえるので、内地のようにたらいまわしにされる心配はないと語っていた。母島でも、島の保健婦が友人のような身近な存在であり、喘息や夜泣きで途方にきて電話をすると「連れておいで」と言ってくれるなど、気軽に助けを求め応じてくれる関係があるようだった。

子育てのサポートについても、島のネットワークが支えとなっていた。父島のHさんは、子どもを預けなければならないとき、自分の知り合いの中で子どもがもう大きくなっている人や資格（保育士や幼稚園教諭）をもっている人などを頼りにしていたようである。預ける人を一人に固定してしまうと、その人の都合が悪いとき（例えば内地に行く）に困るので、もう一人お願いできる人を確保しておく、子どもを預かることのできる人の情報を地域で共有しているなど、かなりうまいチームプレーがなされていた。公的なサポートがない分（おそらく親類もないため）、自分たちで助け合うしかないという意識も強いように感じられた。

さらに質問紙調査でも同様の結果が明らかとなった。子育ての相談相手や子どもを預けたり預かったりする相手について尋ねたところ、子育てしていない友人が、サポートの提供者として機能していた。その傾向は在島年数が長い人に強く、島での生活が長いほど子育てしている・していないに関わらないネットワークがあ

り、そこで子育てが行なわれていることが考えられた。この点は、子育てしている人だけで構成されることの多い内地の子育てネットワークとは異なるものである。小笠原の子育てネットワークは、子どもが生まれる前の島の人間関係とかなり重なっている。普段から同年代の人との交流があり、(子育て以外のことでも)相談する-される、助ける-助けてもらう関係ができていて、その中に子どもが生まれてくるというように考えると、チームプレーの巧みさなども理解できる。

小笠原の特徴の一つである在島年数が浅く一定期間だけ滞在してまた出て行ってしまおう人についてうまくネットワークに入るようなくみができている。一見すると彼らは、親類はもちろんいないし、知り合いも少ないので、既存のネットワークに入っていくのは難しいように思える。しかし、父島では島のサイクル(3月に出て4月に入る)にしたがって来る人については、事前に次はどんな人が来るか、子どもは何歳かなどの情報が申し送りのように交換されていて、島に来てすすなり島のネットワークに入っていけるようである。島のサイクルに関わらない形で個人的に来島しても、海などに行けば誰かしらに会うので、そこからつながりができていくという。しかし家に閉じこもりがちな場合であると、島民とすれ違うことが少ないので、ネットワークに入りにくくなってしまい、その点は解消しにくいようだった。島の子育ての問題点として、人間関係のわずらわしさ、とけこみにくさをあげる人も少ないながら見られた。今後島のネットワークにうまく入っていけない人をどう支援していくかについて考える必要がでてくるかもしれない。

このように小笠原村では、子育てをしている中で起こる困難を自分たちのネットワークの中で解決していた。しかもそのネットワークは、日常生活のネットワークと重なっており、その点で内地の子育てネットワークとは異なる。ネ

ットワークの機能が多岐にわたっていること、重層的であることが、離島での子育ての問題点を解消するためには重要なであろう。

(菅野幸恵・岡本依子)

### 3 節 沖縄県の離島における子育て

#### (1) 対象地域・対象者

本節において言及しているのは、沖縄県内の西表島・X島・Y島の三つの離島の母親たちについてである。このように二つの離島について、固有名詞を記すことができないのは事情がある。西表島は面積289.27 km<sup>2</sup>で、島の人口は約2千人であるので、聞き取り調査に協力して下さった母親が特定されることはまずないだろう。しかし、X島(沖縄島の近隣に位置する)とY島(沖縄島から遠距離に位置する)の両島においては、ともに面積が小さく、島の人口も非常に少ない。よって、島の名を挙げることによって、母親が特定されるどころか、結果的にはその母親の属する家族のプライバシーまで明かすことになってしまう。このような事態を避けるために、本節においては上記のような表記を行うことをお願いしたい。

各々の3島は人口も面積も島のかたちもそれぞれまったく異なるが、住民が従事している主要な産業は、3つとも第3次産業と言えるだろう。詳細に述べれば、主に観光客を対象としたサービス業である。テレビドラマ「ちゅらさん」の影響は著しく、県外から多くの観光客が沖縄県の離島を訪れた。「ちゅらさん」放映以前と以降では観光客の人数にかなりの開きがある。このようにして訪れた若者の一部は当該島に魅せられて、島に移住している。X島を除く2島については、若者の移住が続き、住宅不足という事態にまでなっている。離島においては、人が増えたからといって、そう簡単には住宅を建築することはできないのである。さらに、昨今の日本国内の少子化の波に逆らうかのように、2島では出生者が増加し続けている。このような

事態に伴い、既存の保育施設では対応できなくなっており、島からは県側に新しい保育施設の要求を行っているが、昨今の予算削減のあおりを受け、保育施設の新設や拡充どころか統合や廃止になる危険性さえも生じている。離島部の保育・教育施設がなくなってしまうという事態だけは避けねばならないのではなかろうか。小学校と中学校は同じ敷地内にあり、統合されて運営されている。沖縄県において高校が存在するのは沖縄島と宮古島と石垣島の3島のみであるので、離島部の子どもたちは高校に進学するためには否応なしに島を出ることになる。

### (2) 子育てにおける利点

3島すべてに共通するのは、どの母親も異口同音に「島の自然環境の良さ」について語ることである。都市部に比べるとはるかに自然に恵まれており、特に西表島においては本州では日常生活では見ることのできない動植物が至る所で豊かに成長し息づいている。筆者がこれまで見た限り、沖縄県の離島における小中学校の校庭の大半は自然の芝生で覆われているために、そこで遊んでいた子どもたちの多くは裸足であることが多かった。さらに「空気はきれい」であり、交通事故に遭うこともほとんどない（だが、「ちゅらさん」ブームによる観光客の激増により、島の子どもたちにお構いなく島内を縦横無尽に走り回るレンタカーによって、交通事故の危険性も今では身近になってしまったが）。危険については、子どもたちに対する誘拐や暴行・強姦の心配がないという意見もあった。この点についても、観光客の激増はその心配をも激増させていることに注意したい。

次に、教育問題に関してであるが、島の人口が少なければ少ないほど、教員とほぼマン・トゥー・マンの個人レッスンという非常に贅沢な環境の中で成長できることを、母親たちは喜ばしいこととして捉えている。この点は、離島のみに限らず、過疎地域においては共通するものだろう。

### (3) 子育てにおける問題点

子育てにおける必要な物資が簡単に入手できないという点は、母親たちにとっては大きな問題であるようであった。乳児を抱えた母親が近くの沖縄島等の大きな島に買い出しに行くことはかなり負担の大きいことである。しかし、この時期に必要な粉ミルクや紙オムツを購入しに行かないわけにはいかない。「紙オムツを残り何枚かを計算しながら使う」といった母親の声にも、その苦労がうかがわれる。だが、このように述べる母親の大半は、沖縄県外もしくは沖縄島といった離島部の外から「嫁いできた」こともつけ加えておきたい。必要な物資が24時間入手できるといった「コンビニ文化」から、コンビニエンス・ストアのチェーン店が一店もない地域への移住という生活世界の激変からの戸惑いと解釈できるかもしれない。

もっとも大きな問題と考えられるのが、医療に関する問題である。離島部の大半には病院はなく、診療所があるのみである。しかも、X島のように、診療所さえもない離島もある。高齢者の突然の容体の変容に対しては、個人所有のボートや救急用のヘリコプターで海を越えて病院に搬送することになる。乳幼児の突然の発熱等についても同様であり、またハブに噛まれるという事態も十分に考えられる。いくらボートやヘリコプターで搬送するからといっても、突発的な病気や事故にすぐに対応できるわけではないことは、母親たちにとっては不安であるようであった。このような急病や大事故による怪我ばかりではない。慢性的な疾患の場合は、海を越えて通院しなくてはならない。虫歯になった場合は、治療のために海を越えて通院する必要がある。耳鼻咽喉科や眼科も同様である。

### (4) 解決の手だて

必要物資については、Y島において生活クラブ生協の共同購入グループができていた。メニューにあるすべての商品が購入できるわけではないが、必要物資が島まで配送されるというシ



ステムを生み出した点は特筆すべきであろう。この母親たちは、ほぼ全員が沖縄島外から移住してきた人たちであった。情報はインターネットで入手し、現在の島の生活を少しでもよりよいものにしていくために様々な工夫を凝らしていた。この共同購入グループが母体となって、子育てサークルも結成させていた。いわゆる「よそ者」である自分たちには、用事がある際に少し子どもをみてもらったり、子育てに関するアドバイスを与えてくれるような存在がいなかったことが発端であるようであった。一方で、島で生まれ育った母親にはそのようなサポートがあるかと言えば、そういうわけでもなさそうである。舅・姑に子どもをみてもらう反面、気疲れを生じている母親がいたことも事実である。しかも、島で生まれ育った母親の実家は農業経営の場合が大半であったので、舅・姑ともに朝から晩まで働いていて孫の世話などできないという話もうかがった。

予算削減のために診療所が閉鎖される危険性も生じている現在、島の住民にとって医療問題はかなり切実な問題である。その一方で、島における「生活知」が息づいているエピソードにも出会った。子どもが急な発熱をした際に、保冷剤が切れてしまっていたために困っていたら、豆腐に小麦粉をまぶして冷やすと保冷剤のようになると島の高齢者の方が教えてくれて助かったというエピソードである。このように沖縄の「オバア」の知恵が、若い母親をサポートするといった、地域の縁である「地縁」が残っていることがうかがわれる。上記の新しいネットワークと古い地縁が融合していくと、離島は新しい局面を迎えることになるのではないだろうか。

#### (5) 小括

以上から、いったんの仮説を提示したい。外部のまなざしから、離島部の子育ては自然環境に満ち溢れ、「三間」がそろったすばらしいものだと言われたりする。しかし、現実とは異なるようである。単純に図式的に説明すれば、県外か

ら移住してきた母親たちは、都市部と同様に子育てに関するサポートを得られないといった孤独感を感じており、地元出身の母親は舅・姑からのサポートを得られる反面、家庭内において息苦しさを感じているが、そう簡単には気分転換もできないでいる。前者においては子育てサークルをつくるなど、自らのネットワークをつくり、打開しようと務める母親たちがいた。後者においては、子どもが長期の休み中には島の外に行き、気分転換をする様が見られた。

(宮内洋)

## 4節 まとめと今後の課題

### (1) 離島の保育の総括

本研究の出発点は、離島の保育を手がかりに、これまで日本の保育といわれてきたものを相対化しようという思いであった。そして、過大な一般化はできないものの、限られた知見から、いくつかの問題が明らかになった。

いうまでもなく、離島とは海で隔てられた比較的狭い陸地という生態学的な立地条件をもつ。それはさまざまな人と物の行き来を障害すると同時に、そのことによる生活の不便やそれに伴う不安を生じる。そのような流通性の低さは、それぞれの地域の個別性を強めたであろう。場合によっては、地域間の差違化を人々が意識的に求めたかもしれない。またそれは、地域の自然が損なわれないうちに残っているということとも関係する。これらの事情が僻地と通じる部分であることは、第1節でも指摘された通りである。

本研究で確認されたように、そういう状況での3地域における保育は、いくつかの共通の利点と問題点を生んでいる。

まず利点としては、自然の豊かさが指摘されていた。自然の豊かさは子の身体活動を活性化するとともに、子の探索や遊びを促す要素に満ちている。それは子どもの発達を促す要素になるだろう。さらに地域のなかの緊密な人間関係に包まれた子育てや、その反映としての安全性とい

う側面も利点としてあった。

一方、共通に指摘された問題としては、医療体制の乏しさ、物資の入手しにくさ、子育てサポートや教育機会の不足、といったところあげられていた。その他、子どもの数が少ないことによる子ども同士のネットワークの乏しさの問題もあり、それは発達を阻害しうる要因であろう。

そして、そのような障害に対し、人々は地縁を含めた身近な対人関係の開拓や、その中の隣人の知恵の活用、あるいは共同購入システムの導入などで対応していた。

## (2) 島の保育が意味するもの

離島の保育はこのように困難な要素を抱えていると見ることもできるが、その困難に対して人々は積極的に対処し、たくましく子育てをやりくりしている。しかし、考えてみれば子育てとは、本来はそういった密度の濃いネットワークに包まれて、地域での近隣関係をベースに互助的になされてきたはずの営みである。幼い子どもという存在は、親を含めて周囲のおとなから多大な資源を要求する実に主張的存在であり、その待たなしの要求が親自身に否応なく、自らの判断や経験に基づいて行わざるを得ない子育てのスタイルというものをもたらしたであろうし、また近隣地域や血縁のネットワークを形成させてきたに違いない。

一方、今日の都会的な状況は、その要求に対して第3者が営利的・行政サービスの的に応える保育環境を提供している。そしてその手軽な利便性を享受するという親の姿勢のために、要求的な子どもの姿が相対的に影を潜め、かつ育児における親の主体性が弱まるという事態を生んでいるように思われる。育児は本来よく見知った地域の大人と親とで分担して行うものであったはずであり、またそのことが親子関係や地域の人間関係を育んできたのだという可能性を、もう一度確認する必要がある。子どものそのよ

うな要求性は、家族と地域のネットワーク構築への推進力をもつのかもしれない。

都会の保育の状況も地域で行う育児という体裁をとっているが、地域ネットワークや親の主体性の醸成と親子関係の育成を欠く可能性を秘めている点では、それと似て非なるものかもしれない。もっとも、そのような濃厚な人間関係は母親の個としての自由度を低下させる側面も同時にもっており、人間関係の強さと親の自由度は一種のジレンマの関係にある。

なお、車（フェリー）・飛行機・テレビ・ビデオ・冷凍庫・通信販売・インターネットなど、さまざまな工業製品やサービスが離島でも普及し、それによって「離島」性が次第に薄まって、都市部の保育との落差が埋まりつつある。このような育児環境の平板化が何を今後の離島の保育にもたらすかについては、さらに注目していかなければならない。 (根ヶ山光一)

## 文献

- 宮内洋 1999「沖縄県離島部における幼稚園生活のエスノグラフィ-的覚え書き」、『北海道大学教育学部紀要』78号, 111-146頁(後に『心理学の新しい表現法に関する論文集』第8号、2001年に再録)
- 菅野幸恵・岡本依子・亀井美弥子 2002「小笠原諸島の子育て環境(1)-親たちが認識する育児環境とネットワーク-」、『東京都立大学小笠原研究年報』25号, 1-14頁
- 請川滋大・滝澤真毅・結城孝治 2002「北方圏における子どもの生活とあそび-離島(利尻島)における幼児の生活・あそびに関する予備的研究-」、『北方圏生活福祉研究所年報』Vol.8, 39-47頁
- 矢澤澄子 2003「都市環境における子育ての困難」, 矢澤澄子・国広陽子・天童睦子『都市環境と子育て-少子化・ジェンダー・シティズンシップ-』勁草書房, 60-74